

自己資本比率規制の概要

バーゼルⅡによる自己資本比率規制は、国際的に活動する銀行に適用される最低所要自己資本比率に関する国際合意で、その特徴は大きく3つの柱から成り立ちます。

1. 第1の柱（最低所要自己資本比率）

第1の柱は、銀行が保有するリスクに対して求められる最低所要自己資本比率を定めたものです。自己資本比率の算出における分母は信用リスク、マーケット・リスク、オペレーショナル・リスクの3種類のリスクを足し合わせたものです。自己資本比率の算出式は下記の通りです。国際的に活動する銀行の自己資本比率は、8%以上の確保が求められております。

$$\text{自己資本比率} = \frac{\text{基本的項目 (Tier1)} + \text{補完的項目 (Tier2)} + \text{準補完的項目 (Tier3)} - \text{控除項目}}{\text{信用リスク・アセットの合計額} + \text{マーケット・リスク相当額の合計額を8%で除して得た額} + \text{オペレーショナル・リスク相当額の合計額を8%で除して得た額}}$$

(1) 信用リスク・アセット計測の概要

自己資本比率算出に用いる信用リスク・アセットの算出手法は、以下の2通りがあります。

「標準的手法」は、エクスポージャーの額に所定のリスク・ウェイトを乗じて、信用リスク・アセットの額を算出する手法です。例えば、法人等向けのエクスポージャーにおいては、外部格付機関の格付に応じたリスク・ウェイトを使用することが義務付けられております。

「内部格付手法」は銀行の内部格付に基づき算出した取引先のデフォルト確率や損失率等のパラメータを用いて、信用リスク・アセットの額を算出する手法です。「内部格付手法」は、さらに自行推計のパラメータを利用する範囲によって、「基礎的内部格付手法」と「先進的内部格付手法」に区分されます。

(2) マーケット・リスク計測の概要

マーケット・リスクの算出方法は、規制により定められた一定の算式に入力して算出する「標準的方式」とVaRを活用して算出する「内部モデル方式」の2通りの手法があります。

(3) オペレーショナル・リスク計測の概要

オペレーショナル・リスクの算出手法は、以下の3通りがあります。

「基礎的手法」は粗利益に当局で定められた掛け目を乗じてオペレーショナル・リスクを算出する手法です。

「粗利益配分手法」は粗利益をさらに8つの業務区分等に分類した上で、定められた掛け目を乗じてオペレーショナル・リスクを算出します。

「先進的計測手法」は、銀行独自に開発するモデルにより統計的な手法でオペレーショナル・リスクを算出する手法です。

2. 第2の柱（金融機関の自己管理と監督上の検証）

第2の柱は、金融機関の自己管理と監督上の検証を定めたものです。

ここでは、銀行が第1の柱の算出に含まれないリスク（銀行勘定の金利リスクや与信集中リスクなど）も含めて、リスクの総体を自ら適切に把握・管理しリスクに見合う自己資本を維持すること、並びに銀行が行ったリスク管理の手法等について監督当局が検証を実施することが求められております。なお、監督当局は、銀行の自己資本がそのリスク・プロファイルに見合う水準以下に低下することを防止するため、早期警戒制度に基づき介入を実施し、改善措置を求めることができます。

3. 第3の柱（市場規律）

第3の柱は、開示の充実を通じて、金融機関に対する市場規律の実効性を高めることを定めたものです。

自己資本比率とその内訳、各リスクのリスク量とその計算手法、リスクの管理手法等について情報開示することで、市場参加者が銀行に対する適切な評価を行い、市場規律が有効に働くことが期待されております。そのため、銀行には適時性と信頼性のある情報の発信が求められております。